
夢から覚めても.....

MRZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢から覚めても……

【Nコード】

N8132R

【作者名】

MRZ

【あらすじ】

ひよんな事から出会った九歳時代のなのは達と六課時代のなのは達。更にそこに衛宮士郎達なども加わる事になったから、どうなるのやら。

作者の三つの作品クロスのお祭り企画です。

（前書き）

これは、それは、夢のような時間の続きです。

内容は自分の連載している作品同士のクロスですので、よければそれらを読んで頂けると嬉しいです。

いつもに増して人の多い衛宮邸のキッチン。士郎に翔一、アーチャーと三人のコックがそこにはいた。凜や桜などはその手伝いをしていた、余計に賑やかになっていた。なのはやセイバー達は揃って道場の方で料理を待っている。

そう、人数が多いために昼食は炊き出しの様相を呈してしまい、とてもではないが居間で食べられる状況ではなくなってしまったのだ。故に現在は道場を会場とし、そこで談笑しながら待っているのだ。

「翔一さんが本職のコックさんとは思わなかったなあ」

「でも、士郎君もアーチャーさんも凄いですよ。俺、ここまで料理の手際が良い人、あまり知らないです」

「ふむ、そう言われると嬉しいものだ。さて、早く料理を仕上げてしまおう。空腹が過ぎると何をしでかさか分からん者がいるのでな」

アーチャーの苦笑混じりの言葉に、士郎達は同じように苦笑し頷いた。翔一にはスバルやエリオ、士郎にはセイバーが思い浮かんだのだ。三人がキッチンで料理を作っている傍では、凜と桜、それに二人のはやてとシャルマルに真司を加え、更にはヴァルキリーズからチンクなどが家事手伝い組として参加し、おにぎりを握っている。中に何か入れるべきかと迷ったのだが、士郎達を作る料理をおかずにするので単純な白米のみのおにぎりとなった。そのため、現在人海戦術のようにおにぎりを握っているのだ。

「……意外と手馴れてるのね」

「ま、炊事は得意だから」

真司の手つきを見て凜が感心するようにそう告げると、真司はそれに特に自慢するでもなく答える。その隣ではチンクがセインやデイエチと共に桜と談笑しながらその手を動かしていた。

「そうなんですか。皆さんは真司さんからお料理を」

「ああ。まあ、教えてもらったと言うよりは、知らず身についていたと言っべきか」

「あたしはカレーが得意なんだ。一人で真司兄仕込みの本格的な奴も作れるんだから」

「でも、桜さんも土郎さんがキツカケでお料理するようになったなんてね」

和気藹々という雰囲気では話する四人。互いに料理をするキツカケが男性という共通点を見出し、どこか親近感を感じていた。その話のキツカケは、言うまでもなくおにぎり。桜が初めて作った料理こそ、このおにぎりだったのだ。

土郎に世話になっただけは嫌だと思った桜だったが、料理などした事がなかった。そんな桜へ土郎が作らせたのはおにぎり。互いに相手の分を握り、それを食べあうという出来事を思い出し、桜が微笑んだのを見てセインがその原因を尋ねたのだから。

そうして四人が会話する中、二人のはやては、まるで歳の離れた姉妹のように楽しげにおにぎりを握っていた。

「お、中々やるやないか」

「アーチャー仕込みや。柔らかくもしっかり握る。これが出るまで、結構苦勞したんやから」

自慢げに語る幼いはやて。それにはやては自分と同じ年頃に比べ、料理の腕前が全体的に上だと感じた。そこから、やはりアーチャーと就学する前の年齢から過ごしていたのが大きいのだろうと思い、成程と頷いた。

一方で、はやても大人のはやてに驚いていた。聞けば、自分が魔法と出会う頃に翔一と出会うまでたった一人で過ごしていたらしい。それにも関わらず、家事のレベルは自分と大差がなかったようなのだ。

（うーん……アーチャーおらんでも、わたしは結構頑張ったんか）

（アーチャーさんは厳しかったんやろか？ でも、きっと楽しかったんやろ）

互いに相手の状況を想像し、笑みを見せ合う。その光景を見つめ、二人のシャマルは微笑んでいた。

「……不思議な印象は否めないけど、いいものね」

「そうね。それにしても、私達が現れる前に誰かを居候させるのは同じなんだから、そこには笑っちゃうわ」

味付けをする必要のないおにぎり。それをシャマルが手を出す事になった時、シグナムとヴィータがコンビ揃ってこう言った。

絶対に握る以外に手を出すな。

その言葉が四人分重なつて、二人のシャマルへ告げられた瞬間、聞いていた全員が笑い出したのだ。シャマルは勿論反論したが、味方は残念ながらおらず、はやてでさえ苦笑していたのだ。

そんな周囲へシャマルコンビは大いに不満を抱いたが、それでも誰もが楽しそうに笑っていたので許す事にした。こんな事も思いつくになるだろうと考えただけではない。その笑顔達を見ていて、自分達も密かに笑ってしまいそうになったからだ。

「ん？ シャマル達、手が止まっとるで」

そんな風に思い出しながらはやて達を見つめていたせいだろう。

二人はその手を見事に止めていた。それをはやてに指摘され、二人は我に返った。

「あ、ゴメンなさい。つい考え事しちゃって」

「おお、見事なハモリや。やるな、シャマルズ」

幼いはやての言葉に周囲の者達が笑う。どんなお笑いコンビだとアーチャーが指摘すれば、そんな名前のミュージシャンがいた気がする。翔一。それに真司も頷き、いたと証言。チンク達は揃って聞き覚えがないため不思議そうにしていたが、その笑みは消えていない。

凜と桜はそういう事に疎いため、思い出せず。土郎も同様に聞き覚えはあるようなと言っていた。言われたシャマル達は、そのコンビ名に苦笑。だが、何かを思いついたのか揃って笑顔でこう言った。

「私はシャマルです」

「私もシャルで〜す」

「二人揃ってシャルズで〜す」

そんなお笑いを意識した言動に、キッチン内には楽しげな笑い声が響くのだった……

「……何かキッチンの方が賑やかだね」

「そうね。ま、はやてが二人もいればそうもなるでしょ」

「それに、お兄ちゃんもリン達もいるんだしね」

すずかの言葉にアリサはそう断言し、イリヤは同意するように頷いた。だが、その顔にはとても嬉しそうな笑顔が浮かんでいた。アリサと通じて、なのは達とも友人となったイリヤは、更にエリオやキヤロとも仲良くなり、その機嫌は今までにない程上機嫌だった。そんな三人から少し離れた位置では、五代と光太郎と話すユーノがいた。どうも、ユーノは二人の持つ石に興味を抱いたらしく、考古学的な見地から色々と質問をしていた。

「……じゃ、お二人の石は同じような物なんですか」

「そうだね。そう考えていいと思うよ」

「俺と五代さんの違いは、それに手を加えられたか否かぐらいだろうから」

二人の説明にユーノは頷き、ふと思った事を尋ねた。それは、同じような石を持つのにどうしてその力の発現が違うのかという事。確かに手を加えられているのは要因だと納得出来るが、それにしても違い過ぎるのではないか。

そうユーノは二人へ言葉をぶつけた。それには、二人も返す言葉がない。実際、二人にも明確にそこが分かってる訳ではないのだ。アマダムとキングストーン。二つの輝石が同質の物である事はほぼ間違いない。だが、それがどうしてここまで違う力を持つに至ったのかは未だに謎なのだから。

そんなクウガとRXの秘密に迫ろうとするユーノを見つめ、なのはとフェイトは苦笑。何故ならユーノの目には、確かな憧れの光が見えるのだ。

「ユーノ君、仮面ライダーになりたいのかな？」

「多分、その力の秘密を知りたいんだと思うよ。ユーノ、あまり攻撃魔法得意じゃないから、体を鍛えて出来る事を探してるんじゃない？」

セイバーや恭也達に鍛えてもらいながら、ユーノは自分を高めようとしている事を二人は良く知っている。例え魔法で戦う事が出来なくても、誰かを守る事が出来るようにと。二人からすれば、もうユーノは立派に守る力を持っている。しかし、ユーノが手にしたいのは守る力ではなく戦う力。

そう、盾だけではなく剣にもなれる力を欲しているのだ。その全ては、彼の愛しい者達を守り、共に戦うために。

「ふ〜ん……じゃ、フェイトはお兄ちゃんの妹なんだ」

「う、うん。にしても、アリシアはクロノをお兄ちゃんって呼んでるんだね」

「にやはは、フェイトちゃんと違って受け入れさせてるのも凄いな」

アリシアのクロノの呼び方に、少し驚きを感じるフェイト。なの
はも同じように軽い驚きを浮かべるも、アリシアの性格を多少なり
とも知った今は、クロノが折れたのだらうと察していた。そんな二
人へアリシアは笑顔で頷き、断言した。

クロノは自分の大好きな兄なのだと。その言葉にフェイトは愛お
しさを感じ、その体を抱きしめる。なのはそのような行動に嬉しそ
うに抱きしめ返すアリシアを見て、微笑みを見せる。

（ヴィヴィオがいたら、きっとアリシアちゃんといいお友達になっ
ただろうなあ。それにイリヤちゃんとも）

三者に共通する複雑な事情持ちという接点。それ故に、必ず三人
は意気投合するだろうとなのはは思った。しかし、いたのならそれ
はそれで違う問題を招きかねないとも思っていた。

だからこそ、複雑な心境で視線をフェイトからセイバー達へ向け
た。そこではセイバー二人を中心にオルタにリリイとルビーが会話
をしていて、中々楽しそうに見える。先程聞いたセイバーの名前。
決して幼い自分には言わないで欲しいと頼まれたそれに、なののは
かなりの衝撃を受けたのだ。

アーサー王。世界史に詳しくないなのではでも知っているその名前。
王の剣と呼ばれる剣を引き抜いた事で王となり、国を治める事にな
った存在。おとぎ話になっているその相手に、まさか実際会った事
が出来るとは思わなかったのだ。

（ヴィヴィオもある意味王様なんだよねえ。しかも揃って金髪だし、奇妙な縁を感じるな）

並行世界の自分はアーサー王。対して自分は古代ベルカの聖王。両者揃って王様と縁がある。そんな事を思いながら、なのはは苦笑するのだった。一方、スバル達はいええ……

「え？ 向こうだともう私達とユーノさんが顔見知り？」

「そうなのよ。しかも、母さん経由で知り合ったみたい」

「へえ、何か意外」

スバルはギンガから、並行世界の自分達とユーノの関係を聞かされ、不思議そうな表情を浮かべた。ギンガもまだどこか同じような感覚があるのか、それに頷いて苦笑した。何故なら、ユーノは無限書庫で働いているのだ。

そう、自分達の母がそんな場所へ赴くとは思えなかった。だからスバルもギンガも疑問に感じたのだ。どうしてクイントが無限書庫などへ行ったのだろうと。自分達関連かとも考えたのだが、それならばこちらでも訪れたりするはずだ。しかし、そんな話は聞いた事がない。そのため二人は、きつと向こうの自分達に何かこちらとは違う事があるのだと結論を出した。

「……それにしてもさ」

「何？」

「もうこの状況に違和感感じなくなってきたんだけど、いいかな？」

「いいんじゃない？ 私ももうこれが普通だった気がしてきてる」

そんな会話をするナカジマ姉妹。その近くでは、ティアナがキャロとアルフと共に、エリオとランサーの手合わせを見物していた。エリオが槍を使うと聞いたランサーが、ならと言って始まった稽古それが、既に実戦の様相を見せ出していたのだ。

リニスはウーノやドゥーエと楽しげに会話していたが、そこにメイド服姿のライダーが加わっているのだ。おそらく姉としての苦労話をしているのだろう。トーレはセツと共に小次郎相手に庭で試合を続けているし、クアットロはオットーやデイドと一緒にあって、ユーノ達を見つめ続けるなのは達へ近付き、何かを話していた。

プレシアはジェイルと道場の隅で何かを熱く話し合っている。誰もそこへは近寄らないようにしていた。ノーヴェとウエンデイも先程仲良くなったオルタルビーと話すべく、その輪へ混ざりセイバーやリリイとも接点を得ていて、何かを楽しそうに聞いている。

リインはツヴァイとアインの三人で話していて、ユニゾンデバイスとしてツヴァイを誕生させる方法を聞いていた。ツヴァイはその中で自分も知らなかった頃の話の聞き、少し驚きと感心を示していた。

そんな光景を眺め、ライダーは一人苦笑した。自分だけ浮いていると思ったからではない。最初の頃あったぎこちなさ。それが今はかなり薄れていると感じたからだ。その原因が互いの心の在り様だと思い、ライダーは小さく呟く。

「並行世界とはいえ、元は同じ人物という事でしょね。こうなると、あのセイバー達を知る士郎やサクラ達にも興味があります」

一体どんな風に細かな点が違うのだろう。そんな風に思うライダー

！。そこへ食欲をそそる匂いが漂ってくる。それに全員が意識を向けると、料理の盛られた皿を運ぶ翔一達が道場へ姿を見せるのだった……

楽しくも騒がしい昼食。各自片手におにぎりを持ち、もう片手には箸を、或いはフォークを持っておかずを食べる。一部の者達には専用の皿を用意されていて、その量に驚いた者もいたが、それがあれよあれよと減っていくのを目の当たりにし、それに納得していた。アーチャーの料理の美味しさに六課の者達が驚けば、土郎の料理の味がアーチャーと似ているとなのは達が不思議がり、翔一の料理は土郎達とセイバー達両者から感動される程だった。

スバルとギンガとセイバーズが互いの食べっぷりに感心し合い、自分達と同じ歳であるエリオの消費量に子供達がやや呆然となったりと、大食いの者達は違う意味で話題を提供する。

その一方でプレシアやリニス、アリシアと共に食事出来る事に感動し、フェイトが涙を流したりするような場面や、桜からすずかの事を聞いて凜が自分も姉だと思ってくれてもいいと告げ、その姿にすずかがどこか忍の姿を重ねたりと色々な出来事もあった。

最後には、食後にスバルの希望で五代がストンプを披露する事となり、場所をキッチンへと移す事になったのだが、全員がそれでは見る事が難しいため、ある事をシャルが思いつく。それは、キッチンの一部を転送魔法で道場に運ぶというもの。

それに誰もが一抹の不安を見せるが、シャルはここには自分が二人いると力強く告げ、自信を見せた。土郎達も若干不安はあったものの、シャルの表情を信じる事にし、了承した。

こうしてシャマル二人によるキッチンの転送が行われ、周囲の不安を他所にそれは意外な程あっさり成功する。

「何だ、意外と簡単に終わったな」

「へえ、魔術にも似たような事は出来るかもしれないけど、魔法つてのは伊達じゃないわね」

最悪キッチンが犠牲になると覚悟していた土郎だったが、思っていた以上にあっさりと終わった事に若干拍子抜けしていた。凜も同じような感想を抱いたものの、その芸当に魔法の名は偽りではないと感じていた。

「じゃ、五代さんお願いします」

「分かった。じゃあ……」

シャマルの声に、そう答えて五代はキッチンの傍へ。そして、そのグラスや掛けられたフライパンなどを見つめて頷いた。菜箸を手に取り、まるで太鼓を叩くかのような構えを取って、告げる。

「行きます」

開幕を告げるようにフライパンで音を出す五代。そこから始まる独特な演奏会。何かの曲でもないが、それでもどこか心が躍る印象がある。途切れる事無く様々な物が色々な音を奏でる。それに誰も言葉を発しない。一度見た事がある六課の者達も久しぶりのそれに黙って見守っているし、なのは達やセイバー達はただ感心するように見つめ、土郎達は五代の不思議な演奏に聞き入っていた。

そんな一時間にも一分にも感じるような時間が流れ、五代が最後にグラスを軽く叩いて息を吐く。

「これが俺の二千の技の一つ、ストップです」

その瞬間、全員から拍手が起こった。なのはやフェイト達は勿論、イリヤや凜までもが惜しむ事無く拍手を送った。鳴り響く拍手に五代は笑顔で応え、一礼した。すずかやアリサは共に音楽を嗜んでいるためか、五代の演奏に深い感激を覚えていた。

それを五代へ伝えると、彼はそれに嬉しそうに笑った。そう、彼が知っている二人も同じ事を言っていたのだ。それを五代から聞いて、二人はどこか嬉しくて笑った。どこでも自分達は同じ物に同じ感想を抱くのだなと思えたからだ。

小次郎も五代の演奏を中々に得難い演奏だと評価し、ルビーも絶賛した。今度自分も挑戦してみると息巻いたのだから。そんな中、光太郎が急に表情を険しくした。そして、道場の中心を見つめて周囲に告げる。

「みんな、一旦離れるんだ！ 何か来る！」

その言葉に誰もが身構え、距離を取る。すると、そこへ現れたのは黒服の青年だった。その姿に五代達六課は何かに気付いて表情を変え、なのはや士郎達は揃ってその異様な雰囲気警戒心をあらわにしていた。

そんな周囲へ視線を向ける事無く、青年ははっきりと五代達へ告げた。時間です、と。それが何を意味するのかを悟り、五代達は神妙な面持ちで互いを見た後、視線をなのはや士郎達へ向けた。

「どういう事だ？」

「説明して欲しいのですが」

全員を代表し、士郎とセイバーがそう青年へ尋ねた。それに青年は振り向く事さえせず、ただ淡々と答えた。本来ならば六課はここへ来るはずはなかった。しかし、五代達を元の世界に戻すために時空を超えさせようとした際、妙な干渉を受けてしまった。そのためにここへ五代達だけでなく他の者達まで巻き込んでしまったのだと。そして、乱れた流れを正し、やっと迎えに来れたのだ。そこまで青年は語ると、士郎達となのは達へこう告げる。今日の記憶は決して残す訳にはいかない。全て綺麗にとはいかないだろうが、ある程度は消させてもらおうと。

その言葉に誰もが反論しようとするが、それを光太郎が遮るようにこう言い切った。この青年は、神なのだ。信じられないかもしれないが、それは事実。そもそも自分達を魔法世界へ呼び寄せたのは、この青年がした事なのだから。そう光太郎が告げると、青年は小さく頷いた。

「……神ですって？　嘘でしょ……」

「嘘ではないですよ、遠坂凜。人間は、全て私が生み出した存在ですが……そういう意味では確かに”この世界”は私を神とは思えないでしょう」

青年の何かを含ませるような言い方に、凜は言葉を失う。それは士郎達も同じだ。いきなり現れた存在が、自分達がつい最近全てを理解した事柄を理解している。そう悟ったからだ。故に、相手が神だと信じる事が出来る。

一方、なのは達は青年が本当に神が信じる事が出来ない。証拠も

無ければ、根拠もないからだ。そう思ったからだろう。ランサーがその手に槍を構え、魔力を込め始める。それになのは達だけでなく士郎達にも緊張が走る。

「お前が神なら、この一撃かわしてみせろ！」

そう叫び、ランサーはその魔槍を突き出した。そして、それが青年に届く辺りで告げる。

「刺し穿つ死棘の槍っ――！」
ゲイボルグ

それを青年は避けようともせず、ただその体で受け止めた。それにはランサーさえ言葉がない。しかし、青年はその槍を見つめてゆっくりとランサーの方へ押し返す。それに誰もが言葉を失う。そう、青年の体には傷一つ残っていないかったのだ。

本当ならば心臓を貫かれ、死に至る魔槍。その効果を完全に無効化しただけではなく、残るはずの傷跡さえ消してみせた。そんな光景に言葉を失う周囲へ、青年は告げた。

これで納得して頂けましたか？

今度こそそれにランサーさえもが頷いた。神話の時代を生きていた英霊達だが、だからこそ気付いたのだ。目の前の相手は神話で語られるような神ではなく、真正正銘の神なのだ。聖書で語られる世界を創造した神。それと同じようなレベルの存在なのだろう。そう英霊達は理解した。

なのは達はランサーの一撃をまったく意に介さず、あくまでも丁寧な対応をする青年にある種の恐怖を感じていた。しかし、それでも心には不安はない。そう、それは畏怖というもの。自分達の理解の範疇を超えた相手に抱く感情だったのだから。

「では、別れを告げてください。それだけの時間は残っています」

「……そうですか。感謝します」

周囲を代表し、はやてがそう告げると青年は優しい笑みを浮かべ、頷いた。そして、静かにその場から動き出して道場の隅へと向かう。それを見送り、まずはなのはが全員へ告げる。

「色々と混乱する事もあったけど、凄く楽しかった。大きな私やフェイトちゃんにも会えたし、士郎さん達にイリヤちゃんってお友達も出来た。それと、リインさん達を助けてくれた仮面ライダーの事も知る事が出来て、嬉しかった事ばかりだよ。神様は記憶を消すって言ってるけど、私は嫌だ。思い出は消させない。それが、例えば神様でも！」

なのはの力強い言葉と眼差し。それに誰もが頷く。その気持ちは同じだと。そう告げるように。それになのはは嬉しく思ってた笑顔を見せる。そんな天使の微笑みに、誰もが同じように微笑みを返す。次はフェイトやはやて達が全員へ別れの言葉を述べていくため、次々と喋り出す。不思議と涙はない。会えなくなると思っていないからだろうか。子供達には笑顔しかない。

「なのはと同じで私も少し戸惑う事があったけど、嬉しかったし楽しかった。出来ればこっちのランサーにも会ってみたかったけど、それはまた今度にします。それと、みんなに一つお願いがあるんだ。絶対……また会おうね！」

「わたしの言いたい事は、ほとんどなのはちゃんとフェイトちゃんが言うてまったからなあ。あ、一つだけ。次は旅行行こうな。出来

れば温泉がええ」

「私は、ずっと会いたいつて思ってた桜お姉ちゃんに会えてとても嬉しかった。それと、凜お姉ちゃんにもう一人のライダーにも会えて、イリヤちゃんとお友達になれた。五代さん達には、少しだけ未来の私の事を教えてもらえて楽しかった。今日の事、忘れないよ」

「アタシも言いたい事は出尽くした感じがあるから、一言だけ。イリヤ、今度はあんたがアタシ達のどこに來なさい。泊まりの用意してね！」

「僕も今日の事は絶対忘れません。五代さんや光太郎さん、それに士郎さんの生き方は僕に新しい道を見せてくれました。次に会う時は、僕が皆さんに何か与える事が出来るように頑張ります！」

「エリオ、キャラ、フェイトをよろしくね。イリヤ、今度は一緒にゲームしよう！ 後、みんな大好きだよ！ また会おうね！」

そんななのは達子供組の後を受けたのは、セイバー達英霊組。まずはセイバーが穏やかではあるが、力強く宣言した。

「出会いは奇跡だと、なのはの父上であるシロウ殿が言っていました。であれば、もう私達は奇跡を起こしているのです。後もう一度奇跡を起こしましょう。そう、この時間を欠片たりとも失わないと。この時間で築いた絆は、そんな簡単に消せるものではないと、神に知らしめてやろうではないですか」

その内容に青年は小さく笑みを浮かべ、周囲は頷いて返す。確かに絆はまだ薄いかもしれないが、それでもこんな奇跡のような状況で出会ったのだ。故に、それを大事にしたいと思うのは誰も同じ。

そんなセイバーの宣言に呼応するように、ランサーやアーチャー達も笑みを絶やす事無く言葉を告げていく。

「フエイトやなのはがでかくなるとここまですごくいい女になるとはな。あ、いやはやての嬢ちゃんもだぜ？ ま、次に会えるかわからねえが……楽しみに待ってるわ」

「どこでも凜もはやても変わらないのだなと実感したよ。いや、それはきつと私もなのだろう。故に安心した。互いに何があっても無事に暮らしていくのだとな。今度は、もっとゆつくりと互いの事を話したいものだ」

「並行世界の実体験をする事になるとは思いませんでした。ですが、おかげで六課の人達とサクラ達に会う事が出来ました。もし機会があれば、次は士郎との馴れ初めや六課設立までの経緯を聞かせてください」

「私は長々と喋るのは向かんでな。一言だけ言わせてもらおう。忘れ得ぬ程に非常に稀有で愉快な一時であった」

そして、五人の後は守護騎士達にリイン、プレシアやリニス達が別れを告げていく。フエイトは、プレシアとリニスの言葉と姿を決して忘れまいと、焼き付けるように見つめた。なのは達が終わり、次は士郎達の番となった。

まず、士郎が一番手としてやや戸惑いながらも周囲へ語り始める。

「その……何て言っているかわからないけど、これで一旦お別れっていうのは凄く寂しい。でも、また会えるって俺も信じるから。絶対、また遠坂がうっかかりをやらかしてくれるって！」

士郎のその言葉に凜がすかさず突っ込みを入れ、周囲に笑いを起こす。そんな和やかな雰囲気に対し少し気恥ずかしさを感じながらも、凜がその後を受けて話し出す。その後は桜、イリヤと続き、セイバ―達四人とライダーとなった。

「ま、今この馬鹿がうつかりとか言ったけど、私の家は平行世界移動を実現するために、ずっと昔から研究してるの。だから、その内会いに行くわ。気長に待ってなさいとは言わない。帰ったら、すぐに出迎える準備してなさい」

「まさかすずかみたいな妹が出来るなんて思わなかったよ。そっちのライダーには感謝だね。チンクさん達も会えて良かったです。今度は、炊事以外のコツを教えますね」

「一気に友達が出来て夢みたいだったわ。アリサ、ありがと。それとアリシア。ゲームするのはいいけど、私が初心者だって事理解して相手しなさいよ。次はお母様達もいる時に来て。歓迎するわ」

「まずは、もう一人の私に会うとは思いませんでした。中々有義な時間が過ごせたと思います。ノーヴェ達やナノハ達とも、もつと話してみたいのですが、今はここまでのようです。次回はもっと長い時間過ごせる事を祈ります」

「……また会おう。待っている」

「お、オルタ姉上は口下手です。でも、私も同じです。必ずやまた会いましょう。話していない思い出は、まだ互いに沢山あるはずですから」

「余は待つのは好まん。故にあまり遅いところから行くぞ。その

際は出迎えを頼む。一番いい笑顔と共に、な」

「多くは語りません。思いは同じだと思えますので。また……会いましょう」

そんな風に士郎達が告げ終わると、最後は六課となった。まずは自分がとはやてが一步前に出る。その表情は僅かな寂しさと悲しみを湛えていたが、それも一瞬。すぐに笑顔を見せて力強く告げる。

「何やここまでくると言葉がないですが、とりあえず別のわたしも楽しそうで何よりや。しかもなのはちゃん達と知り合ったのが、わたしよりも早いとか羨まし過ぎるぐらいや。今度、その辺りの話を聞かせてな」

はやての言葉に幼いはやてが確かに頷いたのを見て、周囲に笑みが浮かぶ。そして、はやての後を受けフェイトやなのは達が言葉を告げていく。

「母さんやリニス、それとアリシアと会えて本当に嬉しかった。それともう一人の私にも……ね。ランサーさん、私をよろしく願います。きっと、これからが大変な事になるだろうから」

「えっと、とりあえずユーノ君には是非頑張つて欲しいな。何がとは言わないけど、私ってかなり鈍感だから。それと、私へ。セイバーさんと仲良くね。友達は大切にするんだよ」

大人になった自分達から告げられた言葉。その中でも特になのは疑問符を浮かべた。何をユーノに頑張ってもらうのか。また自分が何に対して鈍感なのかが分からなかったからだ。だが、それを聞いたユーノ達はそれぞれに反応を示す。

ユーノはやっぱりと頷き、フェイトとすずかは何か気付いて少し驚き、はやてとアリサは感嘆の声を上げたのだ。アリシアはのはと同じく不思議そうに首を傾げていた。そんな反応に逆になのは達三人もまた驚いていた。

何せ、フェイトとすずかの反応はユーノへ好意を寄せているからこそのも。そう理解出来たために、なのはは言っではいけなかったかなあと思った。フェイトは苦笑いし、はやては帰ったらすずかに言う事が出来たと密かに喜んでいた。

そしてシグナム達ももう一人の自分達へメッセージを告げ、ツヴアイはその微笑みしさで周囲を笑顔にし、その後はスバル達となった。まず最初にスバルがフロントアタッカーらしく、元氣良く言葉を述べる。

「私、今日の事絶対忘れません！ 小さいなのはさん達に会った事も、士郎さん達に会った事も、みんなみくんな忘れないですからっ！」

「アタシ達が未来なのかなって思ったんですけど、聞けばそっちのなのはさん達とこっちはかなり差が出来てるみたいですね。過去でも未来でもない関係って不思議ですけど、何か納得です。あ、それと次は士郎さん達がミッドに来てください。案内しますから」

「ランサーさん、手合わせして頂いてありがとうございました。また機会があつたら是非お願いします」

「イリヤちゃん、今度はルーちゃんを紹介するから絶対に会おうね。アリシアちゃんもだよ」

「ユーノ君、そっちの私達と仲良くしてね。友達、あまり多くない

はずだから」

前線四人とギンガの言葉に、各自頷いたり微笑んだりと反応を返して、次はヴアルキリーズとなった。ウーノを筆頭にあっさりと、だが気持ちを込めて言葉を紡いでいく。

「私としては、次は海鳴を希望するわ」

「私もウーノと同意見。翠屋だったかしら？　そこで再会記念パーティーしましょ」

「……今度は小次郎以外の者とも手合わせしたい。その時は頼む」

「ま、次はみんなでお出かけしましょ」

「別れは別れでも、一時の別れだ。何、すぐ会えるさ」

「今度はもっと大人数になるだろうから、あたし楽しみにしてるね」

「銭湯に行ってみたいので、是非海鳴で会おう」

「是非、僕らの家に皆さんを招待したいです。お待ちしています」

「オルタとルビーにはホント世話になった。次はアタシにお返しさせてくれ」

「桜さん、今度洋食教えてね。凜さんは中華をお願い。あたし、それまで自分の料理の腕を上げておくから」

「アタシも今度はこっちの世界へ来て欲しいッスね。あ、別に海鳴

組の方でもいいッスよ」

「私もオットーと同じ気持ちです。是非遊びにいらしてください」

十二人の告げる内容に、周囲は頷いたり苦笑したり、更には呆れたり微笑んだり忙しい。そして、最後はジェイルが締め括るべく、こうどこからかうように告げた。

「以上、自慢の娘達による僕の気持ちの代弁だ」

その言葉に全員が笑った。ジェイルの言い方にも要因はあるが、確かに彼女達の告げた内容の根底にあるものは、ジェイルの気持ちと同じだと理解したからだ。そんな風に笑いに包まれる道場。そして、その笑いが落ち着いた所で、光太郎が笑みを浮かべて告げた。

「この出会いは、きっと何か意味があるはずだ。もし、自分達の力でどうにもならない時は俺の……いや、俺達の名を呼んでくれ。どこからでも助けに行くよ。仮面ライダーとしてだけじゃなく、みんなの仲間として」

その言葉に、誰もが言いようのない安心感を感じた。英霊であるセイバー達でさえ、光太郎から何か大きな力を感じたのだ。しかし、光太郎から感じるそれは、少しも恐怖や不安を与えるものではないとも理解し、セイバー達もその言葉に頷いた。

光太郎が終わると真司が士郎達の方へ向いて笑顔を見せた。その告げる内容に、セイバーは期待の眼差しを返して凜は不敵に笑ってみせた。

「セイバーちゃん、次来た時に餃子食べさせるから。それと凜ちゃん、絶対俺の餃子の方が美味いかな！ それ、今度証明してみせ

るから。最後に、みんなに会えて良かったよ。また会おうな！」

周囲が餃子という単語に疑問符を浮かべる中、翔一がやや真剣な表情で告げる。

「俺、絶対忘れません！ 全部覚えておく事が出来なくても、この出来事があった事は必ず覚えてますから！ だから、さよならじゃなくてまた会いましょうって言わせてください！」

その言葉が終わると、六課の者達全員が五代へ視線を送る。締めは五代と、誰もが思っていたのだ。それにやや戸惑いながらも、五代は周囲へ笑顔を向けた。

「えっと、ホント短い時間だったけど、楽しかったよ。土郎君達はこれから元気で！ そして、そっちのなのはちゃん達は、これから大変だろうけど、セイバーさん達と一緒に頑張って頑張つて！ 必ずみんなの笑顔は繋がってるからっ！」

サムズアップ。それに全員が同じ仕草を返す。簡単な意味はそれぞれ六課の者達から聞いていた。そう、誰もがそれをよくしたのだ。そしてその意味が気になって尋ね、教えてもらおうという流れを得て、今のように全員に広がっていったのだ。

そして、それを見届けて青年は静かに全員へ近付いた。視線を周囲へ向けて、青年はこう言った。別れはすんだようですね、と。それに誰もが頷きを返した。

「……では、アギトとその仲間達は一旦元居た世界へ戻します。貴方達も、それと同時に本来居るべき場所へ連れて行きます」

六課がそれに頷き、なのは達も頷いた。土郎達は両者へ手を振り

始めた。ある種の旅立ち。ならば、こう見送るのがあるべき姿と思
ったのだろう。それに五代やなのは達も手を振り返す。青年はそれ
に少し笑みを見せ、その手を五代達ライダー四人へ向ける。

すると、光が四人を包みその体を変身させた。その変化に驚きを
浮かべるなのは達と士郎達。だが、同時に気付くのだ。彼らもまた
セイバー達とは違う意味での英雄なのだ。”仮面ライダー”の姿
をその目で見て、誰もが思う。

正義のヒーローとは、彼らの事を言うのだろう、と……

そして、青年の手から力が放たれると六課となのは達は揃って道
場から消える。青年もまた同様に。道場に残ったのは、士郎達とそ
こで過ごした思い出のみだった。

「なあ、何で俺達はまったく忘れてないんだ？」

「……さっきあの神が言ってたでしょ。私達はいつの影響を受け
てないのよ」

「それは……あれだからですね？」

「そうでしょうね。だからリンが言ったのよ。次はこっちが行くか
らって」

イリヤがそう締め括ると、桜も納得したとばかりに頷いた。そし
て、全員が同じように道場から歩き出す。転送させたはずのキツチ
ンの一部は、いつの間にか戻っていた。それを見て凜があ青年の
仕業だろうと告げた。

地味に親切だとオルタが告げると、本当の神というのは意外とそ
うなのかもしれないとルビーが言う。リリイはそれにあ青年だか

らではと言えば、セイバーが今度その辺りの話を聞いてみなければと告げる。

そうして、士郎達は庭へ出た。当然、そこには誰もいない。しかし、庭の地面には大勢の足跡が残っている。それは、確かに先程までの出来事があったという証拠だ。

……俺達は忘れてないから。

士郎がそう呟くと、風が彼らを撫でていった。それは、その言葉を届けるように空へと消えて行くのだった……

月村家 中庭。なのは達は消える前と変わらない位置関係でそこにいた。誰もが何か不思議な感じを抱いていたが、それが何かは分からないと言った風に首を傾げている。何かとても大切な事があったような。そんな印象さえあるのだが、誰もが何かを思い出せずにいた。

「……とりあえず、準備の続きをするか」

アーチャーの言葉に全員が頷いて動き出す。そんな中、一人なのは空を見上げていた。そこには、気持ちのいい青空が広がっている。

「どうしたの？　なのは」

「うん。何となくだけど、誰かの声が聞こえてきた気がする」

ユーノの問いかけに、なのはそう答えた。それにユーノがやや不思議そうに問い返す。

「何て聞こえたの？」

「えっと……忘れてないからって」

「忘れてないから……か。何だろうね。僕にもその声が聞こえてきた気がしてきたよ」

二人はそのまま空を見上げる。それに周囲も気付き、同じような内容をなのはとユーノが答える。そして、誰もがそれを聞いて同じような感覚を覚えるのだ。何かが思い出せそうで思い出せない。でも、何かとても心が暖かくなる。そんな気になれる感覚。

それを全員が感じ、自然と笑みを浮かべた。そして、セイバーが全員を動かすように声をかける。それに、全員がある仕草を返した。それは、今まであまりした事がないもの。それを、誰もが一斉にしたのだ。

「とにかく、動きましょう。時間があまりありませんが、全員でやればすぐに終わるはずですよ」

「そうだね。みんなで頑張ろ！」

それはサムズアップ。それをした直後、全員がそれに疑問を抱く。まだランサーやアルフ辺りがするのは納得が出来る。しかし、ライダーや小次郎までがするのはさすがに不可解だ。本人達も自分のした事に違和感を感じている。

そんな時、恭也達がそこへ姿を見せた。買出しは終わったと告げ、まだ会場の設営が完了していない事に少し不思議がるが、特に何か

を言い出す事もなく、荷物を置いて手伝いを申し出た。それに再び動き出すアーチャー達。

だが、そんな光景を見つめてアリシアは一人小さく呟いた。

これ、誰かがサムズアップって言ってなかったかな？

自分の手を見つめ、誰に尋ねるでもなくアリシアは呟く。その声は、賑やかさを増した喧騒に消えるのだった……

見慣れた六課隊舎前。五代達はそこに戻ってきていた。時刻はあまり変わっていない。だが、彼らは強烈な違和感を覚えていた。

「……あれ？ 何か妙に満腹感があるなあ……？」

そう翔一が呟くと、それに真司も頷いた。自分もだと。確かまだ朝食は食べてないからお腹空いてるはずなのに。そんな風に告げたのだ。それに周囲からも同調するような声上がる。すると、そこに黒服の青年が現れた。

「……今度こそ貴方達を元の世界に戻す時……」

その言葉に誰もが身構える。しかし、それに青年はやや困ったような雰囲気を出した。

「……だったのですが、色々と力を使いすぎたようです。少し時間をおきましょう。今しばらく、ここで過ごしてください」

そう言つて青年は消える。それに呆れたようにため息を吐くやら、安堵するやらと忙しい六課の面々。そこへ小さな子供の声が聞こえてきた。

「ママ〜！」

「あ、ヴィヴィオだ。今日はやけに早起きだなあ」

愛しの娘の出現にやや意外そうになのはは思いながらも、その体を抱き上げるべく歩き出す。そして、ヴィヴィオの体を抱え上げた瞬間、何かがなのはの中に訴えた。自分はこんな風にヴィヴィオ以外の誰かを抱き抱えた事があつたと。

「……ママ？」

「あ、ゴメンね。少し考え事しちゃった」

なのはが妙な表情をしたので、ヴィヴィオが軽く不思議そうに尋ねると、それになのはは我に返りそう答えた。しかし、そんなのはとヴィヴィオを見ていた真司が何かに気付いて声を上げた。それに周囲の視線が集まるも、それに関らず、真司は大声で告げた。

「そつだよ！ 俺達、さつきお昼食べたんだ！ 土郎君の家で、小さい頃のなのはちゃん達と一緒に！」

その言葉に誰もが不審の目を向けるものの、真司が嘘を吐いているように見えないため、詳しい事を聞きだそうとしていた。だが、そうする前に光太郎が思い出したと言つて、周囲へ告げた。

自分達は一度青年の力で並行世界の壁を超えるはずだった。しかし、そこに妙な干渉を受けて、まったく違う世界へ辿り着いてしま

ったのだと。そこまで聞いてなのは達や五代達も思い出した。

「そっか。記憶消されてたんだ」

「でも、こうして思い出せるって事は、士郎君達やあのはやてちゃん達も思い出してる可能性があるって事ですネ」

「それにしても真司君はよく思い出せたね。何かキツカケなんだい？」

光太郎の質問は全員の質問だったらしく、誰もが真司へ視線を向けた。それに真司は少し苦笑しながら答えた。なのはがヴィヴィオを抱き上げている光景が、幼いなのはを抱き上げて互いに苦笑した瞬間を思い出させたのだと。

それになのはも納得。自分が感じた変な感覚は、それを思い出そうとしていたのかと。一人ヴィヴィオだけがそんな周囲に取り残され、小さく首を傾げていた。

ママ達、一体何のお話してるんだろ？

この後、ヴィヴィオはなのはからこの出来事を聞いて、驚くと共に次は自分も会いたいと宣言。それになのはが苦笑しつつも約束を交わすのだった……

一時の繋がりを得た三つの世界。それが再び繋がる事はあるのだろうか？

それは、誰にも分からない……

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

後編。台詞が多いのはご勘弁を。六課が思い出せるのは、やはり英霊達と違い、もうそれが未来に影響しないためです。

その反面、英霊達は思い出す事は出来ず。しかし、その影響は確かに……

以上でお祭り企画は終わります。また気が向いた時にでも同じような事をやるかもしれません。その時は、どうかよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8132r/>

夢から覚めても……

2011年8月1日22時12分発行